

新撰軍歌集第一編

菟道春千代作

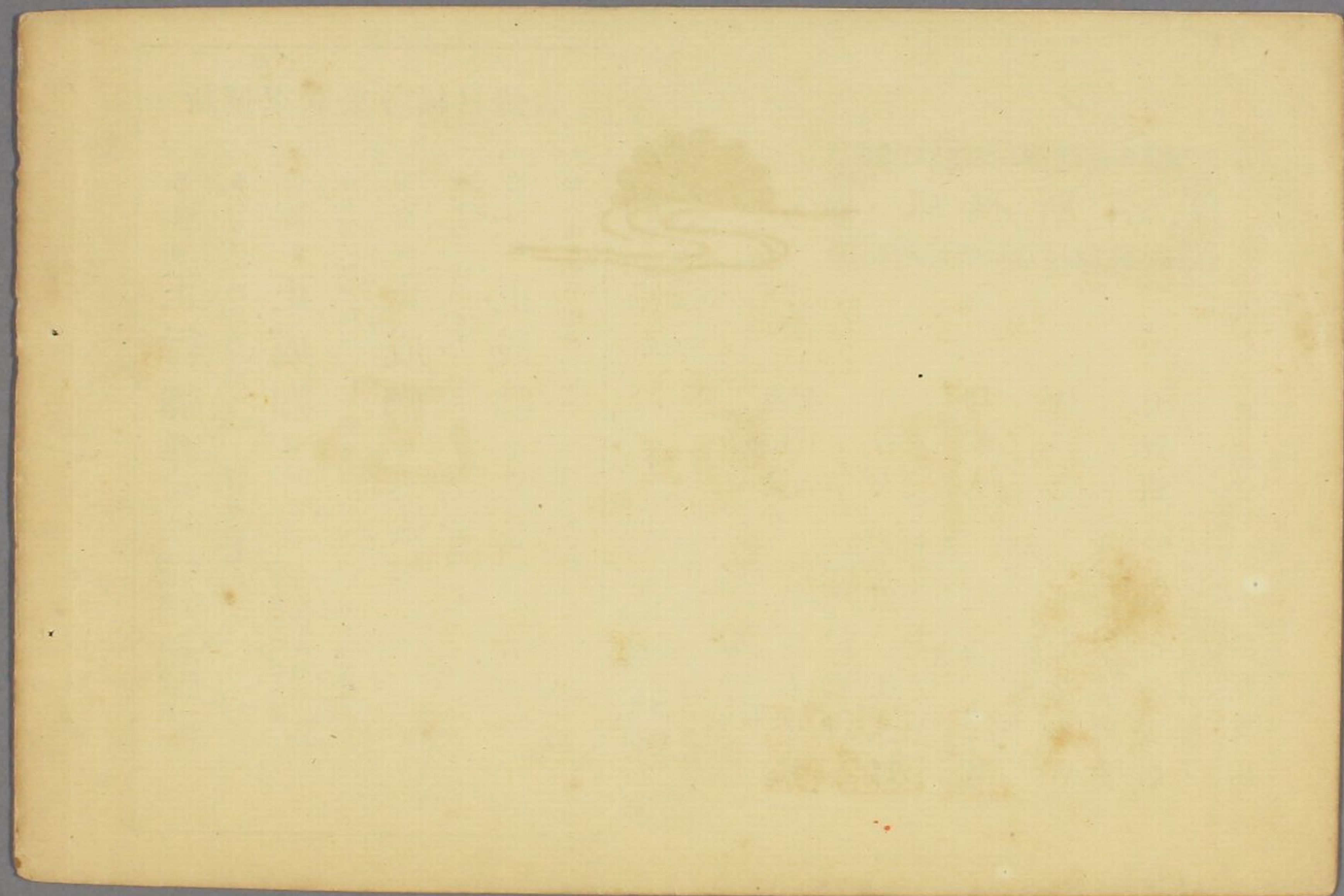


三行卿

東京金港堂梓

四條之段





本書ヲ著ハシタル精神ハ小楠公ガ千歳不磨ノ忠魂ヲ
頌歌シテ自ラ忠君愛國ノ義氣ヲ奮起セシムルニアリ
故ニ軍人ハ之ヲ謠ヒテ忠愛ノ志氣ヲ養ヒ學生ハ之ヲ
唱シテ忠孝ノ道ヲ全ウシ以テ國家ノ良民タラザルベ
カラズ依テ曩ニ榑原近衛參謀官ノ手ヲ經テ

陸軍大將小松宮親王殿下 へ献上ノ榮

ヲ辱ウセシ處今般又正五位子爵本莊宗武殿ノ御傳獻
ヲ以テ畏クモ

皇太子殿下 御手許へ獻納ノ儀ヲ聞届ケラレタ

リ是レ偏ニ小楠公ガ君ニ忠シ親ニ孝シ國ヲ愛シ義ヲ
重ンジ玉ヒシ公ガ在世ノ美德ニ胚胎スルモノナリト

深ク欣慕感嘆スル所ナリ

維時明治二十三年十月

著者 菟道春千代謹識



忠

孝

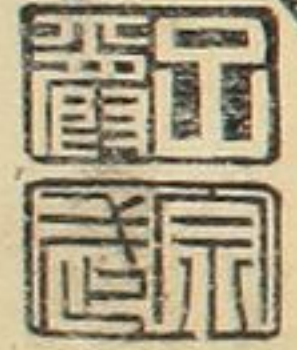
正六位 依田百川





西全

正吉宗武



新撰軍歌集第壹編

東京 菟道春千代 作
京都 宮崎玉 緒 校

正行卿(四條畷之段)

第一節

時しも御代は正平の

三年の春の始めにて

よし野の山は白妙の

ゆきは梢を埋められ

萌出る木々の下草は

みな足利の足したに

踏まれ敷れて哀にも

のぶる力はなほ竹や

折ても節操變じとて

誓ひし公は去年の冬

よし野に詣て大君の

龍顔拜したてまつり

亡父正成が先帝よ

仕へて忠を盡したる

その赤心を受つぎて

我もこゝろを筑紫湯

浪と寄せ來る賊軍を

拒ぎたゝかひ退けて

君の叡慮を休めんと

思へど我は不幸にも

病の多き身なるゆゑ

空しく月日過すうち

もしや病に冒されて

病蓐の上に玉の緒の

絶る事しも有ならば

なき我父に孝ならず

黄泉の鬼も成んより

刃を交へいさぎよく

道を全うせんものと

月の卿とも稱へつる

告るを何時か大君は

最かしことも行在の

出御したまひ拜謁を

朕は汝を股肱ぞこ

厭ひ慎みかならずも

御語下したまはれば

たゞ伏拜む計りにて

涙の雨に伏折れて

君の爲には忠ならず

病の爲に敢果なくも

此所は寄來る賊兵と

生命をすて、忠孝の

思ふこゝろを有明や

隆資卿よこまぐこ

御簾の内より聞し召

南の椽の端ちかく

許したまひし其時に

思へば深く己が身を

生て歸れこ有がたき

朝臣は地は頭額つけ

答へ奉らん言の葉も

擡げ兼たる風情なり

第二節

朝臣ハ漸々立ち上り

鎧の袖をはらひつゝ

一族郎黨去たがへて

參詣てまへに跪つき

生て返らぬ覺悟もゑ

遙々此所に參りしこ

ぬれてぞ重き袂をば

如意輪堂に赴きて

夫より堂の壁の面に

記し、かずは百餘人

落る涙をはらひつゝ

引返さじと思ふより

名をぞ留る名歌をば

吉野を發し河内なる

時は十二月の廿日すぎ

一夜の夢に去年と暮

第三節

明れば年もあら玉の

春ごはいへど未寒き

北山おろし吹まゝに

旗ひるがへし攻來る

八萬餘騎の賊軍こ

四條畷にたゝかふて

身をも家をも打忘れ

只大君のおんためこ

矢猛心をふりおこし

力を極め身をつくし

拒し甲斐も有ばこそ

篠突く如き矢の雨に

痛く其身を痛められ

肉裂け血汐滴りて

今は一步も進めねば

いざ是までご大君の

在せる方をふし拜み

賊の方をば打にらみ

骨肉わけし同胞こ

互にさしつ刺れつゝ

飯盛山にほどちかき

四條畷の夕けむり

消て返らぬ旅のそら

踏む道芝もちる露こ

成れし公ぞ悼ましき

されど朝臣の功績は

名譽こなりて千万の

後の世までも著く

吉野の花と諸こもに

今尙四方に香細しく

忠臣孝子の龜鑑ぞこ

内外の國に薰るなり

内外の國に薰るなり

新撰軍歌集第壹編附録

花廻舎 菟道春千代作

吉野 靜 (唱歌)

みよし野の。山の白雪ふみわけて。入にし人を戀衣。
 きつゝなれにし其君に。永き別をなげきつゝ。身に
 そふものは杖に笠。かたみのつゝみかきいだき。件
 の男にはふらされ。ゆく方ふらず白ゆきや。脛もあ
 らはにかちはだし。血に染む足は進まれど。勝手の
 神の廣前に。まばしぬかづくゆふだすき。かけてぞ
 祈る行末は。義經の世にぬませよこ。おもふ心の色
 にでゝ。戀こやとその人は見ん。吉野法師に捕へら
 れ。君の行方をもらさじこ。立舞ふ姿うつりたる。袖
 振山や御影山。まづやまづ。まづのをたまきくりか
 へし。昔を今になすよしも。なくくかへす舞の袖。
 哀もよほす手弱女の。姿にこゝろよするまに。君は
 落のびたまふらし。今は心もやすければ。是までな
 りこ己が名の。靜に宮居ふし拜み。さして行邊も白
 雪に。消ぬ操や。のこすらん。

四條畷の古戦場の河内國讀良郡にありて今は大坂府の管轄に屬す然して同所は舊大坂城を距ること凡そ三里の東なり。楠正行卿の墳墓は則ち此四條畷の傍邊にして此地を甲可村大字南野小字雁矢と稱し飯盛山の西に方れり。明治二十二年六月二十九日内務大臣に於て神社創立社格宣下の儀を聞届けられたるにより同年九月七日より工事に着手し明治二十三年四月を以て落成の功を奏したる別格官幣四條畷神社は此墓地を距ること十町の東山手にして則ち飯盛山の麓にあり。飯盛山の山頂には今尙城趾とおぼしき形蹟ありて數多の石材等を存せり。正行卿の戰没せられしは後村上帝の正平三年春正月五日にして朝臣の年は二十三才なり。此時正行卿は正四位下檢非違使左衛門尉兼河内守たりしが去明治九年十二月十五日を以て從三位を追贈せられたり。翌明治十年二月 聖上の大和、河内、和泉、攝津の四ヶ國を御巡幸あらせられし時河内國道明寺の行在所より勅使を正行朝臣の墓前に差遣され左の如く勅詔及び金幣を賜はれり

贈從三位 橘朝臣 正行

汝正行父の志を繼ぎ力を王事に盡し遂に國難に斃る朕其世忠を追感す今大和に幸するに因り使を遣し汝の墓を弔し且金幣を賜ふ

天皇 御璽
明治十年二月十七日

是より公の墳墓は大に世に現れ遠近人士の詣で來るもの多く且學生軍人の來りて朝臣の忠功を慕ふもの亦きはめて多しと嗚呼是れ實に忠孝兩全の遺徳なる哉

新撰軍歌集各編目録表

- 第壹編 正行卿 四條畷之段 (定價一冊金貳錢) (附録「吉野靜」一篇)
- 本編は吉野皇居退出に始り四條畷戰死に終る
- 第貳編 正成卿 辭闕之段 (定價金貳錢五厘) (附録楠母慈訓之段)
- 本編は忠諫用ひられず闕を辭して西向する一節なり
- 第參編 正成卿 櫻井訣別段 (近刊)
- 本編は前編を承け櫻井驛に於ての遺訓を作詠す
- 第四編 正成卿 湊川戰死段 (近刊)
- 本編は櫻井驛發向に始り湊川戰死に終る

明治二十三年七月七日印刷 明治二十四年三月十日四版
 全年十一月十三日訂正再版 全年四月十日五版
 全年十二月十五日三版 全年五月廿五日六版
 全年七月廿五日七版

正價金貳錢

著作人 菟道春千代

發行人 原亮三郎

印刷人 日置九郎

發兌 金港堂本店

大賣捌 金港堂支店

同 金港堂支店

